



▲長良川の「鵜飼」。1300年の歴史を持つ古典漁法で、闇の中に幻想的な空間が浮かび上がる。

長良川 鵜飼 観覧船操る船頭さん

協力/長良川鵜飼観覧船船員組合
全国一般岐阜一般労働組合

「人鵜一体」の幻想美

日本三大清流のひとつ、長良川。岐阜市の中心をゆったりと流れる清冽な水は、市のシンボルにして、市民の憩いの場となっている。その長良川で、いま「鵜飼」が夏の夜を彩っている。

闇がおりる夜7時30分、鵜匠の乗った鵜舟が現れた。舟首で赤々と燃えるかがり火の下、川面をいく12羽の鵜が、明りに集まる鮎を次々と飲み込んでいく。どのふくらんだ鵜をみるや、鵜匠が手縄をたぐり寄せ、鮎を吐き出させる。「人鵜一体」の妙技だ。漆黒の闇、そして黒い川面にゆらゆらと踊る赤いかがり火が、幻想の世界をつくりだす。

「すてきねえ」「すばらしいなあ」。観覧船で観光客が酔う。ストツ姿のサラリーマンや熟年夫婦、年輩女性のグループ、家族連れなど、さまざまだ。

1300年の歴史を持つとされる古典

長良川

だ鮎など、ご法度なのである。そんなわけで、長良川の鵜は鵜匠の下で「終身雇用」、おまけに「健康診断」も「休暇」もある。ウらやましい？

船頭さんの職人芸

船上で観光客が鵜飼に心酔していると、その観光客を見守る人たちがいる。観覧船の船頭さんだ。

漁法、鵜飼。戦国の武将・織田信長や、江戸時代には尾張徳川家の保護を受け、名所のひとつとして知られた。俳人の松尾芭蕉は「おもしろうて やがてかなしき 鵜舟かな」と詠んだ。

明治時代に入って保護がなくなり、一時は消滅も危ぶまれたが、明治天皇が岐阜を訪れた際、食膳に出された鮎を気に入ったことで、岐阜県が鵜飼の保護を宮内省（現、宮内庁）に要請。宮内省は鵜匠に「宮内省狩猟局鵜匠」の身分を与えた。これが今の「宮内庁式部職鵜匠」の身分へと引き継がれている。長良川の鵜飼は宮内庁直轄であり、その鵜匠は宮内庁職員、つまり国家公務員なのである。

鵜飼は現在、長良川のほか、京都の宇治川や和歌山の有田川など全国10カ所で行われているが、「皇室御用」は長良川の鵜飼のみ。集客数も毎年10万人規模で断トツだ。格式も規模も群を抜く。

ちなみに、長良川の鵜と鵜匠は日常生活も「人鵜一体」。鵜は死ぬまで、鵜匠

の宅地内にある鳥屋で暮らす。その扱いは丁重で、鵜匠は毎朝、鵜とふれあい、その体調をチェックし、信頼関係を築く。お疲れ気味の鵜には「休暇」もある。

年2回、鵜の「健康診断」もある。というのも「皇室御用」の長良川の鵜飼では、皇室に献上する鮎を取る「御料鵜飼」が行われるからだ。病気持ちの鵜が飲ん



▲鵜飼に用いる鵜。死ぬまで鵜匠と一緒に暮らす。



▲観覧船の船頭歴30年の大ベテラン、相下孝行さん。さおで巧みに船をあやつる。



▲酒が飲み込んで取った魚。

闇が深さを増すにつれ、吹く風も、流れる川も、刻一刻と表情を変える。その自然の変化と、目の前をいく鶴舟の動きに合わせて、握ったさおで観覧船を右へ

「行きたい方向に船を進める。簡単そうだが、これが難しいんだ。やたらに漕いだってダメ。さおの握り、足の運び、ともかくにも経験だね。体で覚えるん

左へ、巧みに操る。その技は10年やっても極められないという。この道30年のベテラン、相下孝行さん（70歳）が語る。

だ。未熟な人は船がフラフラしてる。一目で分かるよ」
そんな匠の技を持つ船頭さんたちが、労働組合を結成して10年。組合名は「長良川鶴飼観覧船船員組合」（上部団体は全国一般岐阜一般労組）で、組合員数は約130名。組織率100%である。
船頭さんたちは岐阜市に雇われている。正規職員ではなく、鶴飼のシーズン（毎年5月11日～10月15日）に限って働く臨時職員だ。ただし、鶴飼のある約5ヵ月間、ずっと雇用が保障されているわけではない。その雇用形態は「日々雇用」であり、形式上は雇用契約を日々更新していることになっているからだ。賃金は日給月給で、社会保険もない。

船頭さんが「日々雇用」とされたのは97年（それまでは委託契約）。労働条件は従来の水準より大幅に下がった。労組副委員長にして船頭歴20年の高木邦和さん（50歳）は、当時からこうふり返る。
「一人で市と交渉しても無理だと痛感

しましたね。やるならバラバラじゃなくて、こちらも一つにまとまるしかない」と。岐阜一般労組が働きかけていたこともあり、船頭さんの労組が誕生した。

高木さんは「市との間で、働く上での約束事がないか定着しない」と厳しい表情で話す。鶴飼は岐阜の重要な観光事業だが、観覧船事業は赤字という。「市

は何かあると、ヒト減らせ、コスト減らせ、ですから」。観覧船の船頭さんの定員数も、じわじわ減らされている。

「臨時職員といっても、この仕事はアルバイト感覚でできるもんじゃない。職人技の世界です。その誇りや働きがい、市はもっと考えて欲しい」

漆黒の闇をいく船頭さんの目は、観光客の安全を見つめる目でもある。せっかくの鶴飼観光も、事故があれば「苦い思い出」になってしまう。鶴飼が終わった船を降りるとき、観光客が「楽しかったよ」「ありがとう」。いちばんの喜びだ。

「職人さん労組」の悩み

組合員は、別の仕事をかけ持ちしている人がほとんどだ。自営業もいれば、サラリーマンもいる。事情は各人各様だが、多くの場合、生活がかかっているという。門をたたいてくるのは、大半が40歳過ぎだ。2年間の見習い期間を経て、試験に

合格しなければいけない。

その賃金はどういうと、まさに同一労働同一賃金。経験年数にかかわらず、3～4年の新米も10年のベテランも同じである。経験と熟練がモノをいう仕事だけに、「正直、そりゃないよ、というのがベテランの気持ちでしてね」と高木さん。今年の春闘では、市に「船長手当」の支給を要求した。現在協議中である。

「労働組合のありがたみ？ 率直に言ったら、よくわからないねえ」。船頭歴8年の佐野憲司さん（48歳）はそう語る。職人さんの世界だけに、一匹狼的な人が多い。「みんなでまとまるって、大変です」と、高木さんは苦笑いだ。でも、この仕事が好きで、誇りもある。その誇りを守るには、相応の待遇が必要と思う。

「今ある雇用も労働条件も、組合があることで守られている。でも、そのことがなかなか組合員に見えない。悩ましいですねえ」。職人さんの労組もサラリーマンの労組も、悩みは同じようだ。



▲清冽な流れをたたえる長良川。